

災害情報研究会 H28 年度 第 5 回 1 日目議事録

1. 日時 : 2016 年 8 月 1 日 (月) 16:30~18:00
2. 場所 : 岩沼みんなの家 (宮城県岩沼市恵み野 2-17-5)
3. 進行 : 市川座長 (レスキューナウ)
4. PC : 市川座長 (レスキューナウ) 野田 (アジア航測)
5. 記録 : 橋元 (清水建設)
6. 出席者 (8 名: 敬称略・順不同)
市川 (レスキューナウ)、高橋 (インフォコム)、橋元 (清水建設)、
野田 (アジア航測)、東根 (建設環境)、中村 (中村危機管理研究所)、
本間 (建設環境)、水間 (インフォコム)

7. 実施内容

(1) アクションカードの編集作業

■アクションフロー図 a26 の再度見直し

- ・報告先を現地対策本部長から現地対策本部とする。
- ・現地社員対応者の説明を用語集に加える。

■アクションフロー図 a27 の検討

- ・主語 (責任者) を現地社員対応者とする。
- ・i1 のフロムを a25 と同様とする。
- ・i21 のフロムを現地対策本部とする。
- ・i61 のフロムを現地災害対策マニュアル等とする。



■アクションカード A-27 の作成

- ・手順 No1:「現地社員対応者は地震の規模、地域情報を気象庁及び地震情報配信会社より収集する。」とする。
- ・手順 No2:「現地社員対応者は自社被害状況を把握する。」とする。
- ・手順 No3:「現地社員対応者は現地災害対策マニュアル等により避難基準を確認する。」とする。
- ・手順 No4:「現地社員対応者は上記 1, 2, 3 の状況に従い社員等をあらかじめ指定された安全な場所に避難させる。」とする。
- ・手順 No5:「現地社員対応者は避難結果を報告し避難者リストを作成する。」とする。
- ・各手順についての入手・伝達方法を確認する。

8. 合宿第 1 日目の行事

□被災地視察（13：00～15：30）

谷地沼さん（語り部）、沼田さん（岩沼市職員）に先導していただき、千年希望の丘内の岩沼市の震災メモリアル施設（交流センター）でまず復興の記録ビデオを鑑賞した後、慰霊碑→相野釜→二野倉→長谷釜→玉浦西地区（津波を受けた住民が集団移転した地区、震災復興のモデルとされている）等を視察。



千年希望の丘

千年先まで子どもたちの笑顔を守りたい

千年希望の丘

MILLENNIUM HOPE HILLS



千年希望の丘（和野全地区）の整備イメージ▲

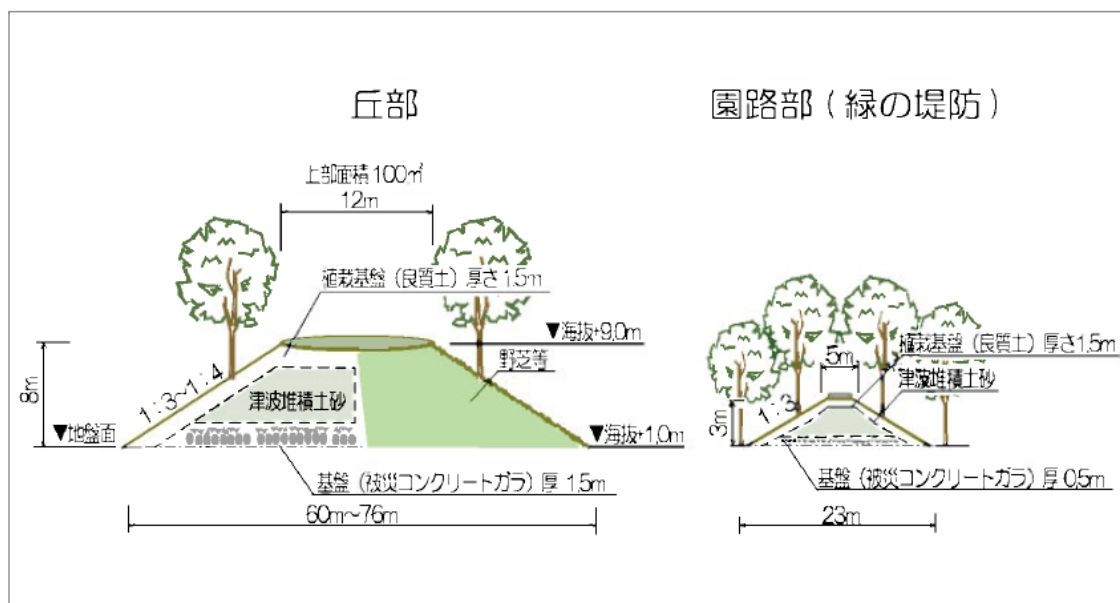
復興の象徴「千年希望の丘」

岩沼市は、将来にわたり持続可能なまちでありたいと願っています。数々の思いや教訓を活かし『千年希望の丘』を整備することで、人々の命を守り、東日本大震災の記憶を未来へ引き継いでいきたいと思っています。これまで、法令や制度、財源等の問題を含め、様々な困難や課題がありましたが、一步一步前に進んできました。

整備にあたっては、国や県のほか、国内外から多くのご支援をいただきました。子どもたちが被災地を思っ一生懸命に育てた苗木が届けられたこともありました。復興を願うたくさんの温かいお気持ちに触れ、心から感謝いたしますとともに、一日も早く復興しなければと誓いを新たにしています。

「千年希望の丘」が復興の象徴となり、また、千年先まで子どもたちが笑顔ですべての人々とともに希望を持ち、幸せに暮らすことができることを期待しています。今に生きる私たちの知恵と力で整備したこの「丘」は、将来、「人類の知恵の遺産」と呼ばれることでしょう。引き続き、ご支援ご協力をお願い申し上げます。

宮城県岩沼市



▲「千年希望の丘」第1号（構造図）

□講和1：谷地沼さん（語り部）

体育館での避難生活などの生々しい被災経験談や、被災6地区の従来からのコミュニティを生かした住民主導型の集団移転を取りまとめた貴重な体験談を伺い、普段からの近隣とのコミュニティがいかに大切かを実感しました。

宮城県岩沼市

国土交通省

◆復興まちづくり推進のポイント（総括）

- 被災6地区の従来からのコミュニティを仮設住宅の段階から活かす。
- 旧村でのまとまりを活かした6集落を1箇所に集団移転
- 専門家の支援によるワークショップが機能
- 復興に対する意欲につながる住民主導型のまちづくり
- 制度が決まる前からの先行的な行動
→ スピード感をもった対応

□講和2：沼田さん（岩沼市教育委員会）

5月に熊本益城町に派遣され、現地で避難所運営プロジェクトチームに所属されて支援にあたられた際の貴重な体験談を伺いました。特に津波により集落内の全ての家屋が同じ被災を受けた岩沼市玉浦西地区と、住居により被災状況が異なった熊本益城町では、その後の復興に向けた取り組みが異なることを改めて知ることができました。

2016年(平成28年)5月14日(土曜日)

東日本大震災で被災した宮城県岩沼市から益城町に駆けつけた同市教委の沼田輝明さん(46)が、ペットの保護に取り組むボランティアの意見に耳を傾けている。



避難所での動物の飼育について意見を聞く沼田さん(左)ら(益城町で)

東日本の教訓生かす 古里の一助に

派遣職員支援に奮闘

熊本地震で被災した県内の自治体から派遣された職員たちが、支援業務に奮闘している。「東日本大震災の教訓を生かす」「古里の役に立ちたい」。様々な思いを胸に、被災地の復興を後押ししている。

「避難所ではペットはとた。避難中も大切な家族のように保護してほしいです。飼いつつ、避難所の衛生環境を守るにはどうすべきか。考えを巡らせた。2011年の震災では実家が津波に流され、親戚家族を失った。そうした中、泊まり込みで避難所の運営にあたった。被災者の不安を解消するには、復興に向かっている状況を感じられることが大切だと学んだ。今年3月9日に益城町に派遣され、避難所対策チームに配属された。「東日本大震災で、岩沼市は全国から多くの支援をもらった。経験を生かして恩返しをしたい」。仮設住宅の整備状況を被災者に細かく伝えることなどを助言した。

熊本市に派遣された仙台市子供育成部総務課長の利大作さん(45)は、震災後1年間の行政の対応をまとめた約700頁の記録誌を持参した。民間住宅を借り上げる「みなし仮設」に分散した被災者に十分な対策がとれず、孤立死を防げなかったといった反省も盛り込まれているという。

「施設復旧には終わりがあっても、被災者のケアは一生続く。地元職員にそう呼びかけ、避難者一人一人の被害や避難場所のデータベース化などを進言。同じ苦しみや悩みを共有する仲間として、末永く支援したい」と誓う。

故郷に刻まれた爪痕に胸を刺す。支援に汗を流す職員もいる。福岡市スボーツ振興課の浦本淳司さん(25)は益城町出身。4月29日から今月2日まで、町立広安小で避難所運営に携わった。

4月14日の「前震」後に帰省。実家は外壁がはがれ、家財道具も倒れていた。

鶴屋百貨店 本館営業

熊本市の鶴屋百貨店は14日、熊本地震の影響で休業が続いていた本館で、一部の営業を1か月ぶりに再開する。

同百貨店は前震(翌日の4月15日)から全館で休業。本館の営業は同23日に再開

肥後旺

ガラン 月明かり外明かりなたまがった 腹の底まで揺さガラン 客が遠のく三代目 休みなし 起きて寝るまでテ休みなし 働きすくめ五十年 休みなし 四百人が崩れ落ちたままがった 容はな揺かれ飛むろっなげ 親より先に逝くたまがった 盗み飲みどま出人吉市